HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ダム建設と沙流川流域の人々の生活(『北海道における発展条件の創出に関する研究-開発庁統廃合後における地域再生政策の検討』(III))
著者	岩崎，まさみ
引用	開発論集，79：61-78
発行日	2007-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

開発論集　第79号　61-78(2007年3月)

ダム建設と沙流川流域の人々の生活

岩　崎　まさみ*

1．はじめに

大規模な開発事業により地域住民の生活が影響を受けることは様々な事例から明らかであり，それらの影響を事前に推測して影響緩和策をとる試みは世界各地で進められている(Burdge 1994, Barrow 2000, Becker and Vanclay 2003, Taylor et al. 2004，岩崎　2006)。しかし社会影響評価（Social Impact Assessment）と呼ばれるこの分野の日本における現状は，先進する諸国と比較すると貧しく，その事例はまだ少ない(岩崎　2005)。北海道，平取町に建設中の平取ダムがアイヌ文化伝承に及ぼす影響を調査し，その影響緩和策を提示する試みは，日本における先駆的事例であり，その努力は広く理解され評価されるべきである。本稿では2003年度から2005年度にかけて行われた平取ダム建設に伴う影響評価調査をまとめた『アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書』(2006)をもとに，本調査の概要および調査結果を検証し，加えて本調査の一部として2004年～2005年にかけて行われた二風谷ダム建設に関わる地域住民の生活意識調査の概要，さらにその調査結果から明らかになった諸問題を検証する。

二風谷ダム（地図1参照）に関しては，その建設途中で地域のアイヌ民族出身者が起こした裁判，また完成後の2003年8月の「台風10号」で沙流川流域一帯に及ぼした被害などにより，ダム建設の必要性，さらにはその被害に関する数々の問題が提起されており，開発事業に伴う社会影響評価の必要性を考える上で重要な事例である。さらに二風谷ダムに加えて，現在北海道開発局が沙流川の支流である額平川に建設を進めている平取ダム（地図1参照）に関しては，二風谷ダム裁判の判決を受けて，地域のアイヌ文化伝承に及ぼす影響評価として「アイヌ文化環境保全対策調査」が行われ，二風谷ダム建設時とは異なる様々な事業が展開されるなど，この10年間の行政や地域住民の意識の変化を知ることができる事例である。本稿の背景となる平取ダム建設，及びその背景に関する詳細は『開発論集第76号』の研究ノート「社会影響評価の手法と二風谷ダムの事例」（岩崎　2005，特に94ページ）を参照して頂くこととして，本稿では総括報告書の内容と2004年～2005年に行われたに二風谷ダム建設にかかわる住民の生活意識調査を中心として，沙流川流域の河川整備計画にともなう諸問題を検証する。

*（いわさき　まさみ）開発研究所研究員，北海学園大学人文学部教授

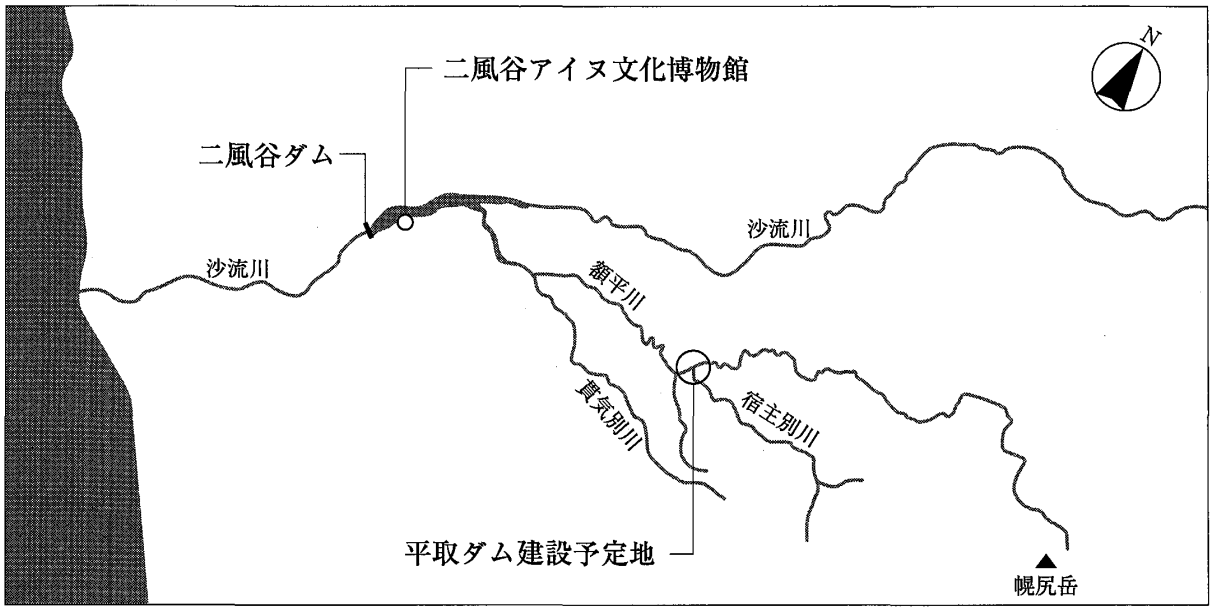


図1
出典：平取町　2006：63

2.「アイヌ文化環境保全対策調査」と「二風谷ダム建設に関する地域住民の生活意識調査」の関連

北海道開発局は1997年に判決が下された「二風谷ダム裁判」を受けて（詳細は岩崎　2005：94），沙流川の支流に建設を予定している第二のダムである平取ダムが地域のアイヌ文化伝承に及ぼす影響を調査し，アイヌ文化環境保全対策を講じることを目的として，その一連の調査作業を平取町に委託した。平取ダム建設予定地は1950年代に泉靖一により調査が行われ，ダム建設予定地一帯がアイヌ民族の資源獲得のための「イウォロ」[1]であったことが明らかになっている。そのことからも平取ダム建設は現在および将来のアイヌ文化伝承になんらかの影響を及ぼすことが予測された。平取町はアイヌ民族出身者を中心とした地域住民[2]，さらに各分野の学識経験者たちの協力を得て調査組織をつくり，2003年度から2005年度までの3年にわたって調査を行った。調査組織とその作業は大きく3つに分けることができる：1）実際に調査作業を行う調査室を設置し，「聞き取り班」「文献分析調査」「現地調査」「シミュレーション」「植物栽培試験」などの作業を分担，2）その調査室による調査結果をもとにアイヌ文化環境保全対策

1　泉靖一は「沙流アイヌの地縁集団におけるIWOR」の中で，額平川流域がイウォロと呼ばれる小区域に分割され，それぞれの区域を割り当てられた家族はそこで掛け弓やクマ穴の猟をする権利が認められていたと記録している（泉　1952）。

2　調査室の中で指導員として調査全体に関わったのは二風谷ダム裁判の原告の一人である。その他，調査室メンバーや委員会の構成員の名前は『アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書』（2006）の第一部5ページに記載されている。筆者は委員会の構成員として3年間の調査に関わった。

を構築する調査委員会，3）さらに調査全体にかかわる広報活動の一環として，一般市民に公開する「イオル大学」の開催。これらの組織に加えて，調査開始から3年目である2005年には，調査室スタッフと調査委員が連携して，各分野の専門的な作業を行うために3つのワーキンググループを構成した。それらは「地域生活影響検討ワーキングチーム」「生態系遷移検討ワーキングチーム」「史料検討ワーキングチーム」であり，各ワーキンググループのメンバーは調査室スタッフと調査委員，さらに必要に応じて外部から各分野の専門家が招かれて参加し，本調査の一貫した特徴であるアイヌ民族出身者を中心とした地域住民と専門家の共同組織を構成した。次章で検証する二風谷ダム建設と地域住民の生活意識調査は「地域生活影響検討ワーキングチーム」が行った調査であり，その中で筆者は文化人類学者として調査委員会に関わってきた経緯から，本調査では聞き取り調査に関する協力者として参加した。

社会影響評価の中で，なんらかの開発事業が行われた場合の影響を推測する手法として，近隣地域に同種の開発事業が展開した場合，そこで起きた変化を知ることにより，新たな開発事業から引き起こる影響を推し量ることが信頼度の高い推測方法とされている（岩崎　2006, Burdge 1994）。「地域生活環境検討ワーキングチーム」は平取ダム建設が地域のアイヌ文化伝承に及ぼす影響を予測するためには，1997年の完成以来稼動している二風谷ダムが地域住民にもたらした変化を調べる必要があると考えた。2005年10月に調査室の聞き取り班を中心に，二風谷ダム建設前後の地域生活環境検討を行うワーキングチームが構成され，チームメンバーによる準備会議で決定した調査計画に沿って，11月から，資料調査および聞き取り調査が行われた。この調査に先立ち，事前調査として2004年11月に北海学園大学と北海道大学の社会学者と文化人類学者たちにより，二風谷ダムの社会影響に関する住民意識調査が行われており（岩崎 2005），その調査結果を基礎として，地域生活環境検討チームの調査が行われた。

3．二風谷ダム建設と地域住民の生活意識調査[3]

3.1．調査の概要

2005年10月，地域生活環境検討ワーキングチームのメンバーは，2つの目的を掲げて，二風谷ダム建設に関する地域住民の生活意識調査を開始した。目的の一つは，本調査から得られるデータを活かして，平取ダム建設によって起こる影響を予測することである。二つ目の目的は，将来にわたり平取ダムの影響評価を行うことを前提として，平取ダム建設以前の現状を知る基礎データを蓄積することである。これらの調査の結果は調査委員会において報告し，「アイヌ文化環境保全対策調査」の総括に反映されている。地域生活影響ワーキングチームの構成員は，

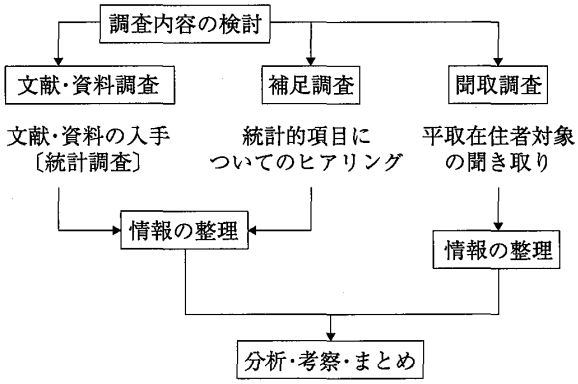
3　本調査において筆者はワーキングチームのメンバーとして調査に加わり，また報告書の執筆を行った。「二風谷ダム建設と地域住民の生活意識調査」に関する詳細は『アイヌ文化環境保全対策調査　総括報告書』（2006）の637ページから678ページに記載されている。ここではその要点をまとめて紹介する。

アイヌ文化環境保全対策調査室の指導員，６人の聞き取り班のメンバー，４人の調査委員，さらに社会調査を専門とするコンサルタントが加わり調査を進めた。４人の調査委員の一人である筆者と調査室の聞き取り班が主に聞き取り調査を行い，コンサルタントが統計資料の分析を担当し，これらの調査結果をワーキングチーム全体に報告し，他のチームメンバーからのフィードバックを受けつつ調査が進められた。

地域生活影響ワーキングチームは主に４種類の調査作業を行った：１）沙流川総合開発事業にともなう既存の調査資料の分析，２）二風谷ダム建設後の変化に関する既存調査データの分析，３）沙流川流域の住民を対象とした聞き取り調査，４）平取ダム建設に伴い生じると思われる地域生活への影響を推測し，それに対する対策を例示すること。４つの作業は図１で示されている通り，チーム全体で調査内容を検討した後，文献・資料調査と聞き取り調査の担当者の二グループに分かれて，作業をすすめた。

文献・資料調査作業を始めるにあたり，信頼できる調査ガイドラインとしてアメリカ合衆国政府機関が作成した「社会影響評価のガイドラインと原則（The Interorganizational Committee on Guidelines and Principles for Social Impact Assessment, 1994）」を用い，特にその中で公開されている「社会影響評価の調査項目（付録１参照）」に沿って調査計画を立てた。統計資料として，人口の変化や産業，経済，社会，地理，文化，自然環境の変化などを示す資料を検証し，さらに補足調査としてヒアリングを行い，情報の整理を行った。

聞き取り調査については，調査室聞き取り班６名，調査室指導員，筆者が担当し，さらに学生ボランティアの協力を得て，2005年10月31日から11月４日までの５日間行った。調査地域を二風谷ダムがある地域を中心に４地域：１）荷負～長知内，２）二風谷，３）小平～紫雲古津，４）富川に分け（地図２参照），さらに調査員を４グループに分け，それぞれの地域における聞き取りを分担した。聞き取り協力者は，それぞれの地域で異なった職業の人々，団体や機関の代表者などを中心に年齢的な幅も考慮して，４つの地域での一般的な意見を聞き取ることが出来ると思われる協力者を選び出した。



作業フロー図

（平取町　2006：639）

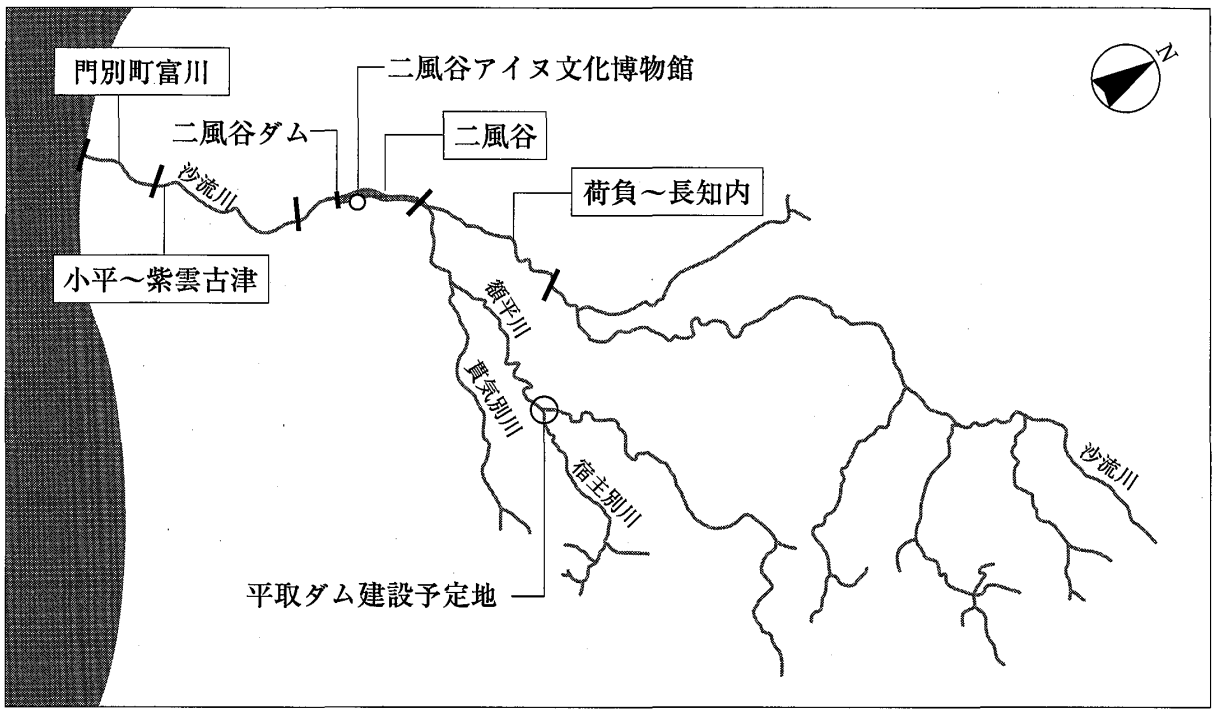


図2
出典：平取町　2006：653

聞き取りに至るまでに，慎重な手続きを踏んで，調査協力を依頼した。まずこれらの人々に手紙により調査の目的，調査結果の活用や調査倫理基準[4]などを提示し，調査協力依頼書を送り，その後電話でアポイントメントをとった。その結果聞き取りに協力を頂いた人は36名であり，その内訳は女性4名，男性32名である。

聞き取り調査は1組3名で行い，聞き手や記録係などの役割を夫々に分担した。聞き取り調査の内容の均一化を計るために，調査を始める時点で聞き取り項目（付録2参照）を作成して，それに出来る限り沿って聞き取りを行った。聞き取りに要した時間は，一人に付き1時間から1時間半であり，承諾を得た上で，記録のためにテープレコーダーを使用した。また聞き取り終了後には協力者に情報の使用を許可する承諾書を書いてもらい，調査協力に対して謝礼を渡した。

3.2. 聞き取り調査から得られたデータの分析方法

聞き取りで得られたデータを数量的に分析して，全体の傾向を判断するために，慎重なデータ分析を行った。つまり聞き取りから得られた質的データを可能な限り，数量的に分析して，

4　沙流川流域の住民たち，特にアイヌ民族出身者はこれまで民族学調査などの調査対象となってきた経験から，「アイヌ文化環境保全対策調査」を始めるにあたり，調査協力者のプライバシー，及び個人の利益を守るために調査倫理基準を作った。詳細は『アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書』（2006：68）を参照。

地域の人々の生活意識の傾向を明らかにするために，調査協力者の各々の意見を文章化して，その後に同様の内容の意見を持つ人の数を比較した。第一に，聞き取りで得られたデータは，ただちにテープ起こしを行ってコンピューターに入力し，その中から二風谷ダムが出来た以降の変化を表していると思われる意見を抜き出した。その場合，一人の人が複数回同じような意見を言っている場合は1回と数え，また内容が類似した意見の場合は，その主旨を読み込んで同質の内容であると確認した場合は，同一の意見として記録するなど，質的データを数量化するために注意深い作業を行った。

テープのデータがコンピューター入力された後，それぞれの文章化された意見を分類する作業を行った。この作業は2つの段階を経て行った。第1段階として全体の傾向を見るために，岩崎(2005：104-108)が2004年に行った聞き取り調査の結果をまとめた16項目を土台として，それぞれの項目に当てはまると思われる意見を振り分け，4地域ごとに一覧表を作成し，分析に至る下準備を行った。2005年度分の調査データを既存の16項目に分類する過程で，新たに必要な項目として4項目が加え，合計20項目(付録3)に分類した。次に聞き取りデータが20項目に整理された段階で，聞き取りに当たった調査員は，それぞれのデータの全体的な傾向や調査を行った印象などから，データを分析するための以下の分類項目を設定した：1)最も多かった意見，2)二風谷ダムが出来て良かったこと，3)二風谷ダムが出来て悪くなったこと，4)二風谷ダム建設前の様子，5)二風谷ダム建設中の様子，6)二風谷ダム建設後の様子，7)アイヌ文化に関する影響，8)次世代に引き継ぎたいこと，9)ダム建設に関する一般的な要望，10)平取ダムに関する意見。これらの分類に対し，各地域で多く聞かれた意見を5つから8つ程度抜き出した。

分析の第二段階として，それぞれ4つの地域のデータの分析結果が明らかになった後に，それぞれの地域の結果の比較対照を行い，沙流川流域全体の変化を総合的に検討した。全体的検討の際に：1)全体で最も多い意見，2)地域的な特徴の2つの点を軸とした。この段階で，聞き取りから得られた結果と文献・資料調査から得られた結果の照合を行い，聞き取り調査の結果が統計資料で説明できる場合は，それらを報告書に取り込む作業を行った。さらに3)平取ダムの影響予測，4)対策案をワーキングチーム全体で話し合った。

3.3. 平取町の一般的変化に関する文献・資料調査の結果

平取町の一般的な変化に関する統計資料や文献などの集約が難しいことや，統計資料などが本調査の目的とは異なる趣旨のために記録されていることから，データとして不備であるなどの理由から，今回の調査は文献・資料調査として不十分であるなどの問題点が明らかになった。この点を考慮しつつ，この調査から得られた結果から一般的変化の傾向として以下にまとめる。

平取町の社会・経済的動向全般の推移を中心に概括を行った結果，以下の事柄が明らかになった。

① 総人口の推移：平成2年以降の平取町の人口推移をみると，平成9年のダム竣工期間を経

て現在に至るまで，暫減の傾向がみられ，これは日高支庁全体においてもほぼ同様の傾向である。

② 地区別人口の推移：平取町内管内別の昭和55年以降の人口推移は，以下の通り概ね右肩下がりとなっている。管内別にみると，紫雲古津地区を含む本庁管内の平成12年付近で微増の傾向を示しているが，これは当該地区に定住者用住宅を建設し入居が進んだためと思われる。このうち，豊糠・芽生・二風谷地区の人口推移の傾向を見ると，二風谷地区は，若干の増減を繰り返しながら暫減の傾向にあり，豊糠地区は昭和58年から61年，芽生地区は昭和63年から平成5年にかけて人口が大幅に減っていることがわかる。

③ 転出入者数の推移：昭和55年以降の平取町全体の転出・転入者数の推移は，ともに若干の増減を繰り返しつつ，全体的には減少の傾向にある。二風谷ダム建設時の工事関係者は住民票を移していない場合がほとんどであったと言われており，本統計には表れていないと考えられる。

④ 産業別従業者数の推移：平取町の産業別従業者数は，平成60年に第2次産業従業者数が大幅に減少しているが，平成2年は日高支庁の推移と異り一旦増加を見せ，その後再び大幅に減少した。平成12年には第3次産業従事者が増加し，日高支庁の推移もほぼ同様の傾向となっている。

⑤ 就業者数の推移：平取町の就労者数は，昭和55年以降，昭和60年から平成2年までは一旦横ばいになったものの，全体的に減少傾向にある。町内就業者数は一貫して減少している一方で，町外就業者数は平成7年まで増加している傾向がみられた。

⑥ 完全失業率の推移：昭和55年以降の完全失業率の増減傾向は日高支庁とほぼ同様で，平成2年以降微増の状況にあるが，平成12年の失業率は北海道平均が5.5%であるのに対し，平取町では2.2%とかなり下回っており，日高支庁全体よりも低くなっている。

⑦ 工業の状況：平成5年以降，工場数，従業者数，製造品出荷額等ともに目立って衰退している。これは日高支庁全体に見られる傾向と同じであるが，平取町の方が減少傾向が強いと思われる。

⑧ 商業の状況：工業ほどの落ち込みではないが，商店数・従業者数・年間商品販売額とも微減状況にある。日高支庁全体では，従業者数の減少傾向があまり強くは見られない。

⑨ 観光客入込み数の推移：

—— 平取町内の観光客入込み数は，平成9年から調査を開始したため，それ以降の観光客入込み数の推移をみると，日高支庁全体では平成14年以降，落ち込みを見せているが，平取町では横ばい状態が続いている。

—— 平取町立二風谷アイヌ文化博物館（平成3年開館）の入館者は平成8年を頂点に一時減少したが，平成12年から増加し始め，平成14年には34,243人に達している。入館者の内訳は高校生以上が大半を占め，中でも近年は団体客が増えている。

—— 二風谷ファミリーランド（昭和53年オープン）の利用者は，平成3・4年度には3万人

を越えたが，平成10年度以降はやや減少傾向にある。施設別ではパークゴルフが最も多くなっている。

――沙流川ならびにダム湖を利用したイベントの参加者数の推移を見ると，平成9年のダム竣工後に増加しているが，天候等の影響が大きいためか，その後は年によって増減が大きくなっている（平成15年の沙流川まつりは台風による災害等のため行われていない）。

⑩ 交通量の推移：振内町26-1，長知内23-3，二風谷18-3，本町71-3，去場81-3の各地点における交通量の変遷について見ると，平成2年から平成6年にかけて振内町が落ち込みを見せているのに対し，他4箇所はほぼ増加しているといえる。振内町の交通量の落ち込みは，樹海ロードができたためであると考えられる。平成9年から11年にかけて，二風谷の休日の交通量が増加している点が特徴的である。

⑪ 所得の変化：平取町および日高支庁における所得や所得水準を示すデータが得られなかったため，納税義務者数で課税対象所得を割った数値を指標としてみると，平取町と日高支庁および北海道とほぼ同様の増減傾向を示しているが，昭和62年当時は全道平均よりも低かったのに比べ，平成10年以降は日高支庁を上回り，全道平均とほぼ同等になるまで微増傾向にある。

⑫ 生活水準の状況：平取町における生活保護人員の推移は，昭和59年度をピークに減少し，平成3年度から横ばい状態にあったが，平成9年以降減少したものの，再び増加傾向にある。昭和55年以降の生活保護率をみると，全国一高い全道平均より高く推移してきたが，平成10年以降は日高支庁全体より低くなるまで減少し，全道平均に近い値で推移していることが特徴的である。

⑬ 財政状況の推移：平取町における歳入・歳出総額の推移は，収入の約4割は地方交付税であり，国の税収の落ち込みにより平成12年度より大幅に減少した。一方，借金返済のための公債費などの義務的経費が増加し，不足する財源を基金に頼らざるを得なくなっている。実質収支比率は近年ほぼ2％台で推移している。

⑭ コミュニティ構造の変化：平取高校卒業生の進路状況の推移をみると，卒業生の減少に伴い町内就職者数も減ってきている。

（平取町　2006：640-652，説明文のみ引用）

3.4. 聞き取り調査の結果

聞き取り調査から得られたデータを分析した結果，沙流川流域の4地域において地域住民が二風谷ダム建設の前後で感じられた変化が明らかになった。本稿では主に：1）4地域における生活上の変化，さらに2）全体的な傾向の中で，特に特徴的な意見を抜粋して紹介する。

1） 4地域における生活上の変化

① 荷負～長知内地域においてもっとも多かった意見：

――二風谷ダムが出来てからガス（霧）が多くなった。

――霧の影響による気温の変化（低下）を感じる。

――二風谷ダムができてから川の流れ，川原，川岸が変わった。

――ダムが出来て，上流から流れてきた土砂が溜まり，川底が上がる。

――雨が降って堤防が切れようと，山が水で削られようと，これは自然のことで生活に極端な影響ない限りいじるものではない。

――川にはダムを造らない，元の川みたいな感じであって欲しい。

② 二風谷地域においてもっとも多かった意見：

――ダムが出来てから（1996年以降）は，二風谷の川向への山菜採りやキノコ採りには，制限をされ，二風谷農道橋も無くなり，不便になったので行かなくなった。

――今の沙流川には，昔にいた魚〈アカハラ・ドジョウ・カジカ・ヤツメウナギ・フナ・コイ・マス・アキアジ・モクズガニ・本ウナギ〉もいない為，魚釣りが出来る場所も無く，子どもたちや孫が遊ぶ川が無い。

――昔，川原には草・花・木が生え，砂利や小砂利もあったので子どもが裸足でも歩け，子どもたちとごく自然に遊んでいた〈キャンプ・水遊び・焼肉・獲った魚を焼いたが，ダムが出来て（1996年以降）川原は，ダムの下に埋まってしまった。

――ダムが出来たお陰で二風谷の周辺地域の環境も整備され，ダム関係のいろいろな仕事が増えて生活が潤った。

――ダムの湖畔は，公園化され，きれいに整備されているが想像以上にダムが自然の景観を壊し，自然豊かな昔の二風谷が無くなってしまった。

③ 小平～紫雲古津地域においてもっとも多かった意見：

――二風谷ダムには相当量の土砂が溜まっていると思う。1年後のチプサンケでヘドロというか土砂が溜まって驚いた。

――2003年の水害以来，水が澄まない。

――今の川は泥だらけ。昔は澄んでいた。

――子どもを昔のように遊ばせたいが学校で怒られるのでついて来ない。今の川では無理。

④ 富川地域においてもっとも多かった意見：

――シシャモは遡上しても，小砂利の場所が無いため産卵が出来ない。シシャモは少しでも泥が付いたらふ化しない。

――浜の漁師が凄く影響を受けている。一つも良い事がない。

――昆布は全然駄目。ホッキ，カレイ，タコは回復する見込みなし。タコはヘドロで死んだ。

――海は泥で1回1回網を洗っている。

上記の意見の他に4地域で聞かれた意見には，以下のような地域的な特徴が見られた。

――長知内地域の人々は2003年の台風の時に逆流を防ぐために，樋門を閉めるという開発の指示があったため，その通りにしたが，その結果，過去にはなかった内水氾濫が起きて，農業に被害を受けた。

――門別地区では二風谷ダム建設以降，ダム提体から下流に流出したヘドロにより漁業への被害が深刻である。特に2003年の台風以降，この状況は悪化している。

――(ししゃもは小砂利と砂がある所に産卵するため)二風谷ダム建設以降，河口の環境が変化して，ししゃもが産卵できなくなっているという意見が門別地区で多く聞かれた。

――二風谷地区の人たちの間ではダム建設以降，周辺の景観が悪くなったという意見が聞かれた。橋が撤去されたことなどから，対岸に行きにくくなり，山菜採りへ行くこともなくなった。また子供たちとの遊び場所であった堰堤が撤去されたことに対して，不便を感じているという意見が多かった。

――二風谷地区の人たちはダム建設に伴うアイヌ文化への影響を強く感じており，特に沼がなくなったことによりガマやヨシ，オヒョウの加工，および食料確保などのアイヌ文化継承に必要な植物が見られなくなったという様子を語っている。またチプサンケなどのアイヌ民族に重要な儀礼に影響が起きている。

(平取町　2006：特徴的な意見のみ抜粋して引用)

2）全体を通して見える変化の傾向

既存の統計調査データの分析を行い，二風谷ダム建設前からダム竣工，そして現在に至る平取町における社会・経済動向を検証した。その結果この地域における最近の変化傾向は明らかになったものの，その変化の背景にある要因を明らかにすることが困難であるという結論に達した。つまりそれぞれの統計上の変化が二風谷ダム建設による影響によるものかどうかということを論じるには，状況が複雑であること，さらにダム建設以外の一般的社会状況の変化が影響していることが予測できることなどの困難がある。これらの理由から，『アイヌ文化環境保全対策調査　総括報告書』(2006)では，聞き取り調査の結果を中心とし，その傾向を統計調査データで補足できる分についてのみ提示している。本稿では統計調査データに関する記述は紙面の関係上，省略するため，これらの詳細は報告書を参照して頂きたい。

①　ガス（霧）の発生：

ガス（霧）が多くなったという変化はほとんどの地区で聞かれた。荷負から上流については特にガスが多くなったという意見が多い。二風谷の人の中でもダムの提体から上流の人が，ガスが多くなったという変化に気づいている。

②　台風の影響：

2003年の台風の影響は二風谷ダムがあったから深刻になったという意見が河口付近と二風谷ダムより上流の地域で多く聞かれた。一方，二風谷地区と本町あたりでは，二風谷ダムがあっ

たから，被害が少なくて済んだという意見が聞かれた。

③　河川環境の変化～水質と魚類：

河口から長知内に至る沙流川流域で「川の水が濁っている」，さらに「魚が少なくなっている」という意見が聞かれた。一部の地域（荷菜）を除いて，川は子供を遊ばせることができない環境になってしまった。

④　水温の変化：

沙流川の下荷負付近では，かつては川の水が凍らなかったが，今は水が凍ってシカが川を渡っている様子が見られる。それに反してダム提体より下流域では逆に川の水が凍らなくなり，過去には凍った川をそりで渡ることができたが，今は凍らない。

⑤　気温の変化：

気温の変化について，門別周辺では特に意見が聞かれなかったが，その他の地域では一様に最近の気温が下がっているという意見が聞かれた。

⑥　雇用状況の変化：

二風谷ダム建設中には沙流川流域全体で建設関係の雇用や商店の利用が増えるなどの経済的効果が見られた。しかし建設終了後は草刈，（流木除去）などのダム管理関係の仕事に限って雇用が継続している。

⑦　河床の変化・碓砂と漁業被害：

土砂堆積について，ダムから上流の湛水区域に土砂が堆積し河床があがっているという意見があり，一方ダム下流域で河床低下が見られ，さらにヘドロが漁業被害をもたらしているという意見が聞かれる。

⑧　鹿の生息状況と被害：

二風谷地区ではダム下流の水量が少ないために砂が堆積し中島が出来，対岸のシカが行き来することにより，シカに関わる交通事故が増えている。このようなシカによる被害は荷菜や長知内などの沙流川流域の各地域で見られる。

地域生活環境影響検討ワーキングチームは二風谷ダム建設に伴う生活環境の変化に関する地域住民の意識を調査した結果をもとに，平取ダム建設に伴う影響予測を試みた。以下の項目がその中でも顕著なものである。

①　動物の行動範囲が制約される。

②　アイヌ文化継承に必要な材料が失われる。

③　信仰の場所が失われる。

④　景観が変化する。

⑤　ガスと気温，ガスが増えるなどの変化が起きる。

⑥　（現状の山であれば）川が濁り，ヘドロが増える。

（平取町　2006：聞き取り調査の結果のみ引用）

聞き取り調査から得られたデータを分析する過程で，地域住民がダム建設に対して望んでいる対策策案，また一般的な要望が明らかになった。これらの意見は「アイヌ文化環境保全対策調査」の総括に反映されているが，本稿では付録4にその一覧を添付する。

4．「アイヌ文化環境保全対策調査」の結果

『アイヌ文化環境保全対策調査　総括報告書』(2006) では，3年にわたる調査から得られた結果を大きく3つの項目にまとめている。第一には平取ダム建設によって影響をうけることが予測される地域は，アイヌ文化伝承においてどのような意味を持つ地域であるかを明らかにし，第二に平取ダム建設によって影響が予想される事象，最後にアイヌ文化環境保全対策に向けての基本理念といくつかの具体的な提案を提示している。

4.1．調査地域とアイヌ文化の関連

平取ダムの建設が進行している沙流川の支流である額平川流域には，その源流である幌尻岳や，その他の山や川や崖など，アイヌ民族の信仰の対象である場所が多く，またアイヌ民族の口承文芸であるウウエペケレやユカラと切り離せない地域があるなど，アイヌ文化伝承にとってかけがえのない重要な場所であると言える。近現代の記録にも，数十名のアイヌ古老たちがこの地域を舞台とした口承文芸を伝えてきたことが明らかである。

「アイヌ文化環境保全対策調査」とは別に行われた考古学調査により，調査地域は古くからアイヌ民族との関わりが深いことが明らかである。2006年現在で，額平川流域には49箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在し，そのうちの7箇所が平取ダム建設予定地に周辺に確認されている。さらにこの地域には縄文時代・続縄文，察文，アイヌ文化期の遺構や遺物が確認され，その後の記録にもアイヌ集落の存在を示す記述があり，1858年の松浦武四郎の記録には平取ダム水没地域に11箇所のアイヌ語地名が記されている。

1952年に泉靖一が記録しているように，平取ダム建設予定地は当時のアイヌの人々の「イウォロ」であり，狩猟・漁労・採集の対象となる動植物が多く確認されている。その中でもアイヌ民族の信仰の対象であるキムンカムイ（ヒグマ）を中心として，ユㇰ（シカ）やシペ（サケ），プクサ（ギョウジャニンニク），シケレペ（キハダの実），アッニ（オヒョウ）などが豊富であり，アイヌ文化伝承を可能にする自然環境が残っていることが分かった。さらにアイヌの人たちの祈りの対象となるチノミシリ（我ら祭るところ）が3箇所確認され，特定の家系がその信仰を継承して，現在に至っている。額平川流域には多くのアイヌ語の地名が確認されており，神が住む山としてアイヌの人々の信仰の対象となっている幌尻岳はポロ・シㇼ（大きい山）を意味するアイヌ語地名である。さらに額平川の周辺での聞き取りでは，子供たちが小魚を捕るなどの川遊びをしたり，大人に連れられてチノミシリに向かって祈るなどの，アイヌ文化が体験を通して継承されてきたことが明らかである。

3年間の調査の結果平取ダム建設予定地はアイヌ民具や衣服の素材となる樹木や植物，信仰の核であるキムンカムイを始めとした動物，食材としての動植物が豊かな場所であり，穀物栽培に適した環境，信仰と儀礼の場でもあり，現在及び将来のアイヌ文化伝承活動には欠かせない場所であることが明らかになった。

4.2. 影響が予測される事象

アイヌ文化環境保全対策調査委員会は，3年にわたる調査で明らかになった結果を踏まえて，アイヌ文化継承のために望ましい条件を備えたこの地域にダムが建設されることによる影響を予測した。第一に平取ダム建設により，アイヌ民族の精神文化を継承する環境が損なわれることである。堤体建設によって下部が削られる岩山に一箇所と人造湖によって水没する岩山に2箇所のチノミシリがあることや，祈りの対象となっているカムイワッカ（御神水）が水没するなど，アイヌ民族の信仰の対象となってきた場所に影響が起きることが予測され，そのことがアイヌの人々の信仰心に及ぼす影響は深刻である。同様の理由でキムンカムイ（ヒグマ）の生息地が損なわれることは，アイヌ文化伝承の核を失うに等しいと言える。

平取ダム建設によりその地域に生息する魚類や動物，また植物の生育環境を損なうことが予測される。そのことはアイヌ文化伝承に不可欠な様々な資源を失うことであり，また継承されてきたこれらの資源利用に伴う知識の継承が困難になることである。その意味では額平川周辺に確認されている198箇所のアイヌ語地名のうち15箇所が失われていくことは，その歴史的・文化的意義が失われることである。

額平川周辺はかつての「イウォロ」としての役割を果たし続けてきたことが，聞き取り調査で明らかになっている。現在に至っても，地域の人々は山菜などの植物資源採集を行い，子供たちは川での水遊びを楽しんでいる。この地域はアイヌの伝統を育んできた原風景とも言え，文化継承活動において原風景を損なうことは将来に向けての可能性を限定することになる。また二風谷ダム建設後の変化にみられるように，地域によっては霧が多くなったり，気温が下がるなどの，生活環境の変化も予測できる。

4.3. 文化環境保全対策に向けて

影響が予測される事象に対して，その影響を緩和するための対策が検討された。委員会はその基本として，二風谷ダム裁判判決の意義を尊重して，アイヌ民族の文化享有権を尊重することを求めている。さらに平取ダム建設予定地の「イウォロ」としての特性を踏まえ，その特性を将来にも生かすことができる対策の必要性を強調している。またこれらの対策の検討，及び実行に際しては，本調査が一貫して実践してきた「地域住民の主体的参画と専門家との協働」を継続させることを求めている。総括報告書にはこれらの基本理念をもとに，具体的な対策を14ページにわたり提言している（平取町　2006：25-39)。

総括報告書の最終章には，全体のまとめとして影響緩和策の計画および実施の際に生かされ

るべき8つの事項が挙げられている。本稿はこれらを以下に引用して,『アイヌ文化環境保全調査　総括報告書』(2006) のまとめとする。

1．平取ダム建設予定地内に存在するチノミシリについては，伝統的なカムイノミを伴う儀礼の様式が持続できるように配慮すること。

2．アイヌ文化伝承に必要な素材を十分に得ることができるような場，植物素材についてはそれらを生育させることができ，かつ収穫できるように措置すること

3．かつて行われていた栽培様式が再現でき，それによってアイヌ文化が伝承できるように，かつ，その様式を多くの人々に理解させるために提示できるようにすること。

4．アイヌ語の地名に表されている地形などの意味が不明になったり消滅することをできるだけ抱けること。あるいは，それらが伝承されるように必要な措置を講ずること。アイヌ語地名を示した地図を作り，地名と意味を表示すること。

5．以上の項目を満足させ，さらにそれらのアイヌ文化を広く理解させるための場として，野外施設では十分ではいと判断されたものひついては，屋内での展示などについても考慮すること。

6．この3年間できわめて重要な資料が得られたが，なおいくつかの分野で補完的な調査が必要と思われる。またここまでに述べた対策や代償措置に関して，位置や形式，方式などを含む具体的な検討が必要になる。それは憲法13条や国際人権規約B規約27条を援用するまでもなく,本調査の経緯を知悉するアイヌ民族の参加を得なければ十分なものとはなりえない。したがって，本調査委員会とは別に，上記を踏まえた組織によって調査を継続し，かつ当該調査に必要な資料の収集・検討を行うこと。

7．現在までに収集・栽培実験が行われている文化的意義を有する植物群については，その資料的価値ならびに将来の活用への期待にかんがみ，栽培を継続すること。その維持のために措置を何らかの形で行うこと。

8．以上の7点とともに，この「調査委員会意見とりまとめ」の中において述べられた諸見解，とりわけ第4章で提示された文化環境保全対策の考え方や具体案については，真摯に受け止め，それぞれについてしっかりした対応措置をとるべきこと。

(平取町　2006：40-41)

5．おわりに

平取ダム建設にともない地元住民の手によって3年間にわたる調査が行われ，ダム建設予定地域がかつての「イウォロ」であり，現在･将来にわたって，アイヌ文化伝承のための重要な拠点であることが明らかになった。本調査の3年目には，1997年の二風谷ダム完成後に見られる生活上の変化を明らかにする住民意識調査も行われ，沙流川流域のダム建設が地域住民の生活になんらかの変化を起こしている実態が見えてきた。これらの一連の調査をもとに，アイヌ文

化環境保全対策調査委員会はアイヌ民族の文化享有権を尊重し，平取ダム建設に伴って起きると思われる影響を緩和するための万全の措置を求めている。2006年3月にまとめられた『アイヌ文化環境保全対策調査　総括報告書』が北海道開発局に提出されてから，早くも1年が過ぎようとしている。3年間の調査に委員として，また文化人類学分野の有識者として関わってきた筆者は，北海道開発局が報告書に込められた地域住民の熱意を十分に汲み取り，適切な影響緩和措置をとることを強く願っている。

付記

「二風谷ダム建設に関する地域住民の生活意識調査」の中で，筆者に関わる調査活動は北海学園大学開発研究所の総合研究（課題名「北海道における発展条件の創出に関する研究」）の分担研究として行った。

付録1：社会的影響アセスメントの調査項目

1　人口に見られる特徴：現在の人口と予測する変化，民族・人種的多様性，一時的・季節的な住民の移入および移出。

2　コミュニティーや組織の構成：地元の政府機関のサイズや組織，中央政府との関連，雇用パターン（過去・現在），任意団体，宗教組織，さらにそれらがどのように関わっているか。

3　政治的，社会的資源：地域において政治的権力やリーダーシップなどがどのように配分されているか。

4　個人や家族における変化：個人や家族の毎日の生活に影響を与える要因など。例えば考え方や家族の特質，友人関係などや，リスクや健康，安全をどのように捉えているかという点における変化など。

5　コミュニティー・リソース：自然資源や土地利用，住宅の利用や健康や警察，消防や衛生施設などの公的サービスなどを指す。コミュニティーが存続し続けるためには，歴史的・文化的資源が重要であり，この中には先住民文化や宗教集団などに及ぼす影響も考慮される。

（出典：The Interorganizational Committee on Guidelines and Principles for Social Impact Assessment, 1994）

付録2：聞き取り調査のための調査項目

次のことについて聞かせてください。

・沙流川の昔の様子
・昔と今の沙流川での川遊び，魚獲りの様子
・もし川が昔どおりならば，子供や孫に川でどんな体験をさせてあげたいと思っているか
・今の川ではそれは可能か
・（不可能ならば）いつごろ，どんなふうに川が変わったからできなくなったのか
・二風谷ダム建設時の様子
・二風谷ダムができてから沙流川がどう変わったか（昔の川は馬車などで渡れたとか。水量の変化）
・二風谷ダムができてからの沙流川の川原，川岸はどう変化したか（河畔林）
・二風谷ダムと動物の関わりに見られる変化について
・二風谷ダムができてからの二風谷の沙流川の右岸の様子の変化（畑・水田があったとか）

・沙流川沿いにあるアイヌ語地名について知っているもの
・アイヌ文化に関わる素材について考えられる二風谷ダムによる変化（ヨシ，カヤなど）
・二風谷ダムによって沼がなくなったことに関しての変化（貝やペカンペ（ヒシの実）の変化，沼にオヒョウやシナを浸けていたことの変化）
・今後，川はどうなって欲しいか

（平取町　2006：677）

付録3：データ分析のために用いた20項目

二風谷ダムが出来たことによる変化としてあげられた主な事柄

1　変化がみられない
2　改善された
3　経済効果の有無について
4　二風谷ダムへの理解について
5　ダム工事中の様子について
6　ダムと水害について
7　ダムとシカの関わりに見られる変化について
8　ダムと気候の変化について
9　景観への影響について
10　山菜への影響について
11　沙流川の昔と今について
12　沙流川の魚に見られる変化について
13　開発局（管理棟）に対する意見について
14　2003年の台風による被害について
15　土地収用について
16　農業・漁業への影響について
17　平取ダムの建設について
18　アイヌ文化の伝承について
19　要望（開発以外の，町など関連機関への）
20　その他

＊1～16項目は「社会影響評価の手法と二風谷ダムの事例」（岩崎　2005：104-108）より
＊17～20項目が本年度調査で新たに加えられた項目

（平取町　2006：678）

付録4
対策案（要望）

（一般的な要望）
――ダムの堤体の上を地元の人だけでも車で通して欲しい。
――ダム建設をする時に反対・賛成の意見を取り入れ，ダメなところは無くするようにすれば良い。
――二風谷ダムは平成15年の台風で上流に影響を与えた。広い範囲で迷惑を被っているということを開発は考えて欲しい。
――二風谷ダムができたことによって，逆流して水田が水没するから対策をなんとかして欲しい。
――平成15年の台風の時，二風谷ダムをもっと早くから流していればあんなにいっぺんに水が来る

事は無かった。
——二風谷ダムは空にして洪水調整にしたら，災害は防げるようなものになる。
——ダムが出来てしまったものはしょうがないので，出来るだけ川底を下げてもらいたい（大雨対策として）。開発が金を掛けて掘るぐらいなら業者に（砂利を）安く提供して掘ってもらえばいくらでも川底は下がる。昔はそれで下がっていた。
——樋門を止めるのなら堤内（堤防で守られている側）の沢水を排出するポンプを設置してもらうか，それが出来ないのなら堤内の水田を買い上げて欲しい。
——川はダムを造らない，元の川みたいな感じであって欲しい。
——子どもと自然の関わりを追求した工事が必要ではないかと思う。
——大水害があっても流域の皆さんが安心して生活できるような川であって欲しい。
——沙流川をいじる時には地域住民への説明と要望をフルに取り入れていくこと。なぜ川が汚れるのか，なぜ洪水が起きるのか，みんなの意見を聞いてもらいたい。
——魚が自由に行ったり，来たり出来，もう少し魚などが棲みやすい環境を作るよう努力してもらいたい。川岸を河畔林にすれば魚も来ると思う。
——山の奥の森林の保全をして欲しい。沙流川の水をきれいにするには，山に植林をして保水力を高めることだと思う。
——治水なら木を伐らないで植えるとかなんかの方法があるはず。
——何でもかんでもコンクリートで固めては魚は棲めない。自然に近い状態で芝生を植えたりすれば，全部ブロックよりはいい。そういうやり方（コンクリートで固めるやり方）は時代遅れだ。

（平取ダム建設に伴う要望）
——平取ダムは例えば300 mmの大雨が降っても，水の調整をちゃんとしていれば下流の人たちにはそんなに影響は無いと思う。
——平取ダムができたら，道路が改良される。ダムでもできないとあそこの道は改良されない。
——ダムを造るにしてもはっきりと住民に説明してから建設を開始した方がいい。
——平取ダム建設による影響を早く調べ上げ，自然・文化に配慮できたダムを造れたらいい。
——平取ダムを造ってペナコリ（荷負の二風谷ダム管理橋より下流）に溜まる土砂を止めて欲しい。
——ある程度，自然を大事にする建設の仕方をして欲しい。
——平取ダムは要らない。ダムを造るなら下流の堤防を強化して欲しい。
——平取ダム建設予定地は，どう考えてもダムを造るような場所ではないと思う。
——平取ダムは是非あの場所に。最高の場所だと思う。富川の住人としては是非必要なもの。平成15年の台風で平取ダムは無くては駄目だと証明されたようなもの。
——温暖化が進んできたら，200ミリの雨の降る回数が，今後100年間に1.5倍になるという。それを考えると平取ダムは過大なもの（より大きなもの）が必要になってくる。

（アイヌ文化に関して）
——先祖代々の山や川（チノミシリや湧き水のこと）をそのまま放置しておくといつか無くなるので，ダムを造ってきちんとしてもらえばいいと思う。そういうことによって上る（先祖代々の山や川に行くようになる）と思う。
——（二風谷が）サケが戻ってくる地域になった今，もう一度繁殖できるような川づくりをして欲しい。
——今の子ども達がこれからもチプサンケ（舟おろし）を続けていくつもりなら，築堤を作って整備してあげたいと思う。

（アイヌ文化に関わることで，二風谷ダム建設後，不自由になったり，影響を受けたこと）
――ダム建設により沼も埋められてなくなったのでガマやヨシが採れなくなった。
――昔からのアイヌの人たちの風習が川原では，出来なくなっている。
――沼にオヒョウを浸けて川で洗うということも出来なくなった。
――アイヌ文化に大事な舟おろしができなくなり，ダムによっていろいろな伝承を学ぶことが出来なくなった（舟おろしに関わるイナウケ・カムイノミ・着座の方法・食べ物の作り方）。
――二風谷ダムが出来てからは，二風谷の近辺にオニガヤは生えていない。

（住民へ対して）
――地域性も考えてみんなが使いやすいダムにしてもらってはどうか。
――ダムが出来上がった後に不便さを感じた時の対処の予算をつけてもらう方がいい（二風谷ダムの経験から）。
――ダム建設までの最初の話し合いが大事。
――自然が無くなるのは確実で，無くなった時の影響をもっと考えないといけない。
――みんなも災害が起きてから訴えるだけでなく，普段から山と川に関わることが良い。みんな沙流川が変わったことは分かるが，山が変わったことは歩かないから見ない。そういうことを勉強してもらいたい。

（平取町　2006：674-675）

文献一覧

泉　靖一　1952「沙流アイヌの地縁集団におけるIWOR」『民族学研究』16巻3・4号pp.29-45.

岩崎まさみ　2005「社会影響評価の手法と二風谷ダムの事例」『開発論集第76号』pp.89-109　北海学園大学開発研究所.

岩崎まさみ　2006「開発事業にともなう社会影響評価（Social Impact Assessment）の手法」『立命館言語文化研究』pp.3-23　立命館大学言語文化研究所.

平取町　2006『アイヌ文化環境保全対策調査　総括報告書』.

Barrow, C. J. 2000. *Social Impact Assessment: An Introduction*. London: Arnold.

Becker, Henk and Frank Vanclay 2003. *The International Handbook of Social Impact Assessment: Conceptual and Methodological Advances*. Cheltenham: Edward Elgar Publishing Company.

Burdge, Rabel J 1994. *A Conceptual Approach to Social Impact Assessment*. Middleton: Social Ecology Press.

Taylor, Nichokas C, et al. 2004. *Social Assessment: Theory, Process and Techniques*. Middleton: Social Ecology Press.

The Interorganizational Committee on Guidelines and Principles for Social Impact Assessment, 1994. *Guidelines and Principles for Social Impact Assessment.*